

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The actual usage of "nitsumaru" and the its progressive change in meaning : An example of "misuse" in modern Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3668

“煮詰まる”の使用実態と意味変化の過程 ——現代日本語の「誤用」研究の一例として——

新野直哉

論文要旨

動詞“煮詰まる”は、〈まもなく結論が出る状態になる〉という意味で使うのが「正用」、〈行き詰まってどうにもならなくなる〉という意味で使うのが「誤用」とされる。この“煮詰まる”をめぐる問題のうち、先行文献、「正用」「誤用」の発生時期、「誤用」浸透の背景等については、さきに拙稿を発表した。本稿はそれに続き、国語辞書の「誤用」の扱い、世論調査の結果、実例の調査結果等の分析に基づき、この語の今日の使用実態について考察した。そして、2度の世論調査の結果からは「誤用」はむしろ高年層で勢力を伸ばしているとみられること、「誤用」例は「人間の心理状態に関する例」「人間の思考に関する例」「物事の状況に関する例」に3分類できることを示した。さらに、原義からの意味変化の過程に関して考察を行い、〈長時間加熱された結果、水分がなくなり、味が濃くなって、それ以上煮ることはできない、という状況になる〉というところから「誤用」が生じたと考えた。

キーワード【“煮詰まる”、「誤用」、意味変化、比喩、現代日本語】

1 はじめに

まず、次に挙げる新聞コラムの一節をご覧ください。

[1] 「議論が煮詰まる（行き詰まる）」「やおら（いきなり）立ち上がる」。カッコ内に示した意味だと思いませんか。これらはいずれも誤用・俗用です。（編集委員 鈴木明男）（「[教えて!]「敷居が高い店」 間違いですか」読売 2014.7.25 東京夕刊）

[2] 日本語の誤用例として、「アイデアが煮詰まったので、休憩して仕切り直す」との文がよく紹介されます。これは、本来いい結果が引き出されてまとまる意味で使われる「煮詰まる」が、行き詰まるというニュアンスで使われる誤用です。（山田亮「スーパー主婦楽家事 煮込み料理 煮詰まるとおいしい」東京 2016.2.29 朝刊）

動詞“煮詰まる”を〈行き詰まる〉という意味で使うことを「誤用・俗用です」「誤用です」としている。この語は、後に見るように2度にわたり「国語に関する世論調査」の調査項目になっているほか、「日本語本」（一般向けの、日本語に関する本）やテレビのクイズ番組、さらに新聞・雑誌・ウェブ上の記事で、「間違い言葉」「おかしな日本語」の例として繰り返し取り上げられてきた。

筆者は、これまで、現代日本語における「誤用」¹⁾として知られる事例について論じてきた(新野 2011、2020 など)。そして、この“煮詰まる”をめぐる問題のうち、先行文献の状況、今日の意味の確認、「正用」「誤用」の発生時期や「誤用」浸透の背景等については、さきに新野 (2021b) を発表した。さらに、この語に、原義・「正用」・「誤用」のいずれでもない、国語辞典には出ていない意味があることを新野 (2021a) で述べた²⁾。

本稿は、それらに続き、事例の調査・分析をふまえた今日の“煮詰まる”の使用実態の把握、原義から「正用」「誤用」が発生した過程の考察を行う。

引用中の下線、{ } 内は筆者が補ったものである。必要な場合以外、漢字字体は現行のものに直し、振り仮名は省略した。

2 先行文献の概観

“煮詰まる”の「誤用」に関する先行文献については新野 (2021b) で述べた。それをまとめると以下の①～③のようになる。

- ①いまだに先行研究の整理や事例の調査・分析を踏まえた論文の形での研究成果は発表されていない³⁾。
- ②「間違い言葉」「おかしな日本語」の定番例となったのは意外と新しく、管見の限り21世紀が始まった2001(平成13)年に初めてこの語の新しい意味を問題視する文献、さらにそれを“誤用”と呼ぶ文献が見られる。
- ③国語辞書でも同じ2001年刊行の『三省堂国語辞典』第5版・『日本国語大辞典』第2版(以下『日国』とする)に「誤用」が掲載されるが、これらに先んじ、1998年刊行の『ハイブリッド新辞林』が国語辞書で最も早く「誤用」を掲載したと思われる。

2-1 国語辞書の記述

ここで『ハイブリッド新辞林』、『日国』の記述を見ておく⁴⁾。

- [3] ①長時間煮て、水分がなくなる。「みそ汁が一・る」②十分に議論・相談などをし、結論が出る状態になる。「計画が一・る」③新たな展開の可能性が見られなくなる。「一・った議論」(『ハイブリッド新辞林』)
- [4] ①煮えすぎて水分が蒸発してしまう。*破戒(1906)〈島崎藤村〉二一・一「朝は必ず生温い飯に、煮詰った汁と極って居たのが」*大阪の宿(1925-26)〈水上瀧太郎〉九・七「心持が重たくなって、いたづらに煮詰まる鍋を見てゐる事が多かった」②議論や考えなどが出つくして、問題点が明瞭な段階になる。③問題や状態などが行きづまってどうにもならなくなる。*朝霧(1950)〈永井龍男〉「隣り組を通じてなされた配給品の、日に日に細ることで、戦争の次第に辛く煮詰って来てゐるのが知られた」*記念碑(1955)〈堀田善衛〉「煮つまって来た戦争がいろいろのことを煮つめて

考えさせた」(『日国』)

国語辞書では、[3]・[4]のように「語義」の一つ目に原義、二つ目に「正用」、三つ目に「誤用」を掲げるものと、「誤用」を注記の形で取り上げるものに分かれる(新野(2021a: 2)参照)。そして、本稿では、過去10年間(2012年以降)に刊行された国語辞書の最新版を対象に、「誤用」に対する言語意識の示し方を調査した。その結果は次のとおりである。

○「誤り」「誤用」とするもの

- ・〔問題の解決処理に行き詰まる意に用いることもあるが、誤り〕(『新明解国語辞典』第8版・2020。第7版(2012)も同文)
- ・**参考**最近では「行き詰まる」の意味に誤用されることもある。(『旺文社国語辞典』第11版・2013)

○「誤用から」「本来は誤用」「本来は誤り」とするもの

- ・③(誤用から)→ゆきづまる②{=「進行していた物事がうまく進まなくなる」}(『学研現代新国語辞典』改訂第5版・2012)
- ・**補説**近頃では、若者に限らず、「煮詰まってしまっていい考えが浮かばない」のように「行き詰まる」の意味で使われることが多くなっている。本来は誤用。**②**の意{=「正用」}は1900年代後半に始まるようである。「行き詰まる」の意は1950年ころの使用例があるが、広まったのは2000年ころからか。(『大辞泉』第2版・2012)
- ・**③**議論や状態などが行き詰まる。「半日以上会議でアイデアも煮詰まった」{中略} **③**は本来は誤用。(『現代国語例解辞典』第5版・2016)
- ・**注意**「議論が行き詰まる」の意で使うのは本来は誤り。(『明鏡国語辞典』第3版・2021)

○「俗」な用法とするもの

- ・③〔俗〕考えが行きづまって、頭がはたらかなくなる。(『三省堂国語辞典』第7版・2014)
- ・③〔俗に〕どうにもならなくなる。**類**いきづまる(『三省堂現代新国語辞典』第6版・2019。第5版(2015)も同文)

○言語意識を示さないもの

- ・③転じて、議論や考えなどがこれ以上発展せず、行きづまる。「頭がーってアイデアが浮かばない」(『広辞苑』第7版・2018)
- ・③時間が経過するばかりで、もうこれ以上新たな展開が望めない状態になる。「ーった演奏」(『大辞林』第4版・2019)
- ・③転じて、議論や考えが行きづまる。(『岩波国語辞典』第8版・2019)

『大辞泉』の後半の内容は、同じ出版元(小学館)の『日国』の用例によるものと思われる。「誤用」が「広まったのは2000年ころからか」とするもの、2001年刊行の『日国』が掲

載したことによるものか。

そして、この語は、原義・「正用」・「誤用」に加え、いずれの辞書にも出ていない〈(長時間煮た後の煮汁や具材の味のように) あるもの (の持つ性質・特質) が凝縮されて濃厚になる〉という意味 (これを〈凝縮〉とする) でも使われる。この点については新野 (2021a) で詳述した。

2-2 新聞の用字用語集

次に、新聞各社編刊の用字用語集で“煮詰まる”を見てみる。

『毎日新聞用語集』の「誤りやすい慣用語句」というコーナーでは、2007年刊「改訂新版」から掲載し、

- [5] 議論などが進んで結論を出す段階になること。「行き詰まる」の意で使う例が増えているが、誤解を招くので避ける (394)

としている。

『読売新聞用字用語の手引』では、2011年刊の第3版から「誤りやすい慣用語句、表現」の一つとして挙げ、次のように説明している。

- [6] 「議論が煮詰まる」といえば、検討が十分になされて結論の出る段階になる意。「行き詰まる」という意味を認める辞書もあるが、解釈が正反対になってしまうので本来の意味で使うようにしたい。(387)

2014年刊の第4版と2017年刊の第5版では、「解釈が」以降が、「解釈が正反対になってしまうので、本来の意味でのみ使うか、言い換えるなどしたい」という文言になっている。

一方、『朝日新聞の用語の手引』の「誤りやすい慣用語句・表現・表記」というコーナーは、これらに大きく遅れ、2015年刊「新版」までは出ておらず、2019年刊の「改訂新版」になって初めて現れる。

- [7] (議論が) 煮詰まる

▽本来は「議論や意見が出尽くして結論を出す段階になる」ことだが、俗に「どうにもならなくなる、行き詰まる」意でも使われる。誤解されないよう、本来の意味なら「まとまる、固まる」、逆の意味なら「行き詰まる」など、別の表現にするのが望ましい。(625)

これらでは「誤用」と位置付けてはいないが、『日本経済新聞』の『NIKKEI用語の手引』の「誤りやすい慣用語句」では、2011年版で

- [8] 「煮詰まる」は、議論などが進んで結論を出す段階に近づくこと。「行き詰まる」の意で用いるのは誤用。(395)

と明確に“誤用”と呼んでいる (2017年版も同文)。

3 世論調査の結果

本章では、この語の意味に関する過去の世論調査の結果を見ていく。

この語は「平成 19 年度国語に関する世論調査」（2008 年 3 月実施。以下「19 年度調査」とする）の「Q20. 言葉の意味」の調査項目になっている。さらにその 6 年後には「平成 25 年度国語に関する世論調査」（2014 年 3 月実施。以下「25 年度調査」とする）の「Q22. 慣用句等の意味について」の調査項目になっている。この 2 度の調査（概要は文化庁ウェブページ https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/index.html 参照）は、「七日間に及ぶ議論で、計画が煮詰まった」という例文を示して、五つの選択肢から一つを選ばせるものである。

19 年度調査の選択肢は、次のとおりである（文化庁ウェブページ掲載の「報告書」による。以下同じ）。

- ・(ア) (議論が行き詰まってしまって) 結論が出せない状態になること
- (イ) (議論や意見が十分に出尽くして) 結論が出る状態になること
- (ウ) アとイの両方
- (エ) ア、イとは、全く別の意味
- 分からない

25 年度調査では (ア)・(イ) は同じであるが、(ウ) は「(ア) と (イ) の両方」、(エ) は「(ア) や (イ) とは全く別の意味」となっている。また、19 年度調査では、(エ) を選んだ場合は「どういう意味か具体的にお答えください」として意味を記入させているが、25 年度調査ではそれはない。

この調査結果を世代別にまとめたのが表 1 である。太字は「正用」すなわち (イ) と「誤用」すなわち (ア) のうちポイントの高かった方である。

2 度の結果を比較してみる。全体で見ると、「正用」が優勢なのは変わらないが、「誤用」

表 1 19 年度・25 年度調査の世代別回答結果 (数字は %)

年度	「正誤」	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代～	全体
19	「正用」	16.3	26.6	25.5	46.7	77.3	78.4	67.1	56.7
	「誤用」	76.3	69.5	73.0	50.3	20.4	15.3	17.1	37.3
25	「正用」	28.0	38.0	31.5	35.7	56.0	70.0	65.5	51.8
	「誤用」	57.3	54.0	61.5	59.1	38.1	23.6	21.0	40.0

との差は19.4ポイントから11.8ポイントに縮まっている。世代で見ると、10代から40代で「誤用」が優勢なのは変わらない。しかし、30代以下は「正用」との差は縮まっており、特に10代・20代は30ポイント前後縮まっている。それに対し、40代は逆に両者の差が20ポイント近く広がっている。50代以上は「正用」が優勢なのは変わらないが「誤用」との差は縮まっており、特に50代は39.0ポイントと大きく縮まっている。

筆者は、新野(2020)で、やはり「誤用」の定番事例である“気がおけない”と“世間ずれ”について、約10年を隔てた2度の「国語に関する世論調査」の結果を、ほぼ同世代といえる1度目の20代と2度目の30代、1度目の30代と2度目の40代……のように比較した。その結果、「加齢が「誤用」を「正用」に「是正する」効果は認められず、むしろその逆と考えてよい」という結論に至った。今回は2度の調査の間隔が6年と短いため、この観点からの検討はできない。したがって大まかな見方になるが、この6年で、若年層では「正用」が勢力を伸ばしているのに対し、高年層では逆である、というように感じられる。この調査の回答者は、日中の在宅率が高い高年層の比率が高く、このことが全体で見ると「誤用」が勢力を伸ばす結果になった要因であろう。

19年度調査の結果に対し、毎日新聞客員編集委員(当時)・岩見隆夫(1935~2014)は

[9] 時代の流れ、などと達観するのではなく、人生の先輩である中高年層が話す意味が正確に伝わる社会に直していくべきなのだ。若年層に迎合するわけにはいかない。(岩見2008)

とするが、その後はむしろ「人生の先輩」のほうで「誤用」が勢力を拡大していることになる。その理由を推測するのは難しいが、岩見(25年度調査直前の2014年1月にこの世を去っている)の言うような若年層への迎合といった意図的なものがあるとは考えにくい⁵⁾。

4 今日の実例の調査結果

本章では、今日“煮詰まる”がどのような意味で使われているかを調査した結果を示す。

4-1 BCCWJ

「今日」の状況を見るため、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(国立国語研究所作成)の2000年以降のデータを検索した(中納言2.4.5 データバージョン2020.2、短単位検索で、語彙素「煮詰まる」で検索)。結果は表2のとおりである。全体では「誤用」が「正用」の2倍以上の例があり、レジスター(用例のないものは挙げていない)ごとに見ると特にブログでは圧倒的である。

表2 BCCWJにおける“煮詰まる”の用例数（2000年以降の資料）

レジスター	原義	「正用」	「誤用」	〈凝縮〉	計
図書館・書籍	5	3	6	2	16
特定目的・知恵袋	4	2	6	0	12
特定目的・ブログ	3	1	12	0	16
出版・書籍	4	7	7	3	21
出版・雑誌	3	2	5	0	10
出版・新聞	0	2	0	0	2
計	19	17	36	5	77

4-2 新聞記事

いわゆる「三大紙」（『朝日』・『毎日』・『読売』）の記事を、各紙の記事データベース（『聞蔵IIビジュアル』・『毎索』・『ヨミダス歴史館』）を用い、「煮詰ま」「煮つま」「につま」の3種類の検索キーで検索した。検索対象期間は、2014～2018年の5年間である。著作権等の関係ですべての記事が検索対象ではない。

その結果は表3である。本稿冒頭の〔1〕・〔2〕のようなこの語の「誤用」自体を話題にする記事が『朝日』『読売』に5件ずつと『毎日』に3件、見出しがヒットするものの著作権の関係で本文が読めない記事が『読売』に11件あり、表中の数字はこれら以外の記事での用例数である。

3紙とも「正用」の用例数が「誤用」よりも多いが、『毎日』『読売』と比べると全体の用例数が倍以上の『朝日』は、両者の勢力差がかなり小さい（ただし、「誤用」のある記事は、複数の県の版に出ている同じものが重複してヒットしているケースがあり、それを整理すると52例になる）。この数字と、第2章で見た、『朝日新聞の用語の手引』が他紙の手引と比べて遅く2019年刊の版になって初めて「誤用」を取り上げているという事実とは、関連があるように思える。

なお、「不明」はいずれも川柳の例で、

〔10〕煮詰まってそろそろ社長出番です（「朝日なにわ柳壇 西出楓楽選／大阪府」朝日2014.4.12朝刊）

のような、場面がわからずどの意味か判断し難い例や、掛詞的に二つの意味を持たせた例である。

表 3 「三大紙」における「煮詰まる」の用例数 (2014~2018)

新聞	原義	「正用」	「誤用」	〈凝縮〉	不明	計
朝日	35	82	60	4	3	184
毎日	20	49	14	3	0	86
読売	32	27	14	1	0	74
計	87	158	88	8	3	344

5 「誤用」例の検討

5-1 「議論が煮詰まる」

この語の「誤用」はしばしば「議論が煮詰まる」という形で取り上げられる。その例は、新聞では『朝日』に 38 例、『毎日』に 19 例、『読売』に 22 例 (BCCWJ では 1996 年の「図書館・書籍」に 1 例) 見られるが、その大半は、

[11] 井上氏は会見で「議論は煮詰まってきている。出来れば午後の与党協議で一定の方向を出せばいい」と述べ、合意できる可能性を示唆した。(「「非戦闘地域」基準修正案、憲法整合なら検討 公明幹事長」朝日 2014.6.6 夕刊)

[12] 今月中旬までに国会の意見をとりまとめる方針だが、民進党の野田佳彦幹事長は川端氏との会談後、「議論が十分煮詰まっているとは思えない」と記者団に語り、ずれ込むこともあり得るとの認識を示した。(「皇室：退位巡る議論、13 日にも国会、今月中に結論」毎日 2017.3.7 東京夕刊)

[13] 首相 相当議論が煮詰まってきたということだ。残念ながら開催頻度はそれほど多くないが、相当の議論を積み重ねてきた。いよいよ各党が実際に案を出す時を迎えている。(「国会論戦の詳細 9 日の参院予算委から」読売 2017.5.10 東京朝刊)

のように、一読して「正用」例とわかるもので、判断に迷うのは次の 2 例程度である。

[14] 部員同士が議論するのを見守り、煮詰まるまで助言はしない。制球に悩む投手がいれば、そつと脇に立つ。{中略}「萎縮して野球をやってほしくない。仲間と考えるとこそ、技術的にも人間的にも成長できる」。体験に裏打ちされた信念だ。(「[きょう人十色] 東山高野球部監督 足立景司さん 26=京都」読売 2017.5.15 大阪朝刊)

[15] 国連大使らの議論では、発端である 11 月の北朝鮮軍による大延坪島砲撃を非難するべきだとする米国と、韓国にも自制を求める安保理議長声明を早く採択するべきだと訴えるロシアの対立が続いていた。{中略}議論が煮詰まる中、緊急会合は議長声明案の詰めに入った。焦点はいぜん、11 月の大延坪島砲撃で北朝鮮を非難するかどうか。(「(北朝鮮と安保理：31) 大延坪島砲撃：3 名指し批判できるか」朝日

2017.10.18 夕刊)

[14] は、監督が、部員同士の議論が「結論の出る状況」になるまで助言はしないのか、「先に進まない状況」になるまで助言はしないのか、どちらにもとれるが、監督の助言がより必要なのは後者の状況であろう。[15] の中略部分では安保理緊急会合で日米と中口の意見が対立している状況が描かれており、「議論が煮詰まる中」は〈議論が対立し妥協点が見いだせない中〉と解釈するほうが妥当である。「議論が煮詰まる」のうちこの2例は「誤用」例と考えた。

5-2 「誤用」の意味分類

今回筆者は、「誤用」例をその意味により3分類した。用例数の多い順にA・B・Cとする。Aは「人間の心理状態に関する例」、Bは「人間の思考に関する例」、Cは「物事の状況に関する例」ということになる。

A〈人間が、精神的・肉体的に苛酷な状況、不本意な状況に置かれたことによるストレス等で、イライラや欲求不満を強く感じる、余裕のない追い詰められた心理状態になる〉

[16] 夕食後リビングで、いい食後酒なんかをかたむけながら、夫と大好きな音楽を聞き、愛を語らうゆうべ。そんな結婚生活を夢見てた。夢と、バリバリ厳しい現実には挟まれて、私は結構、煮詰まってた。(BCCWJ・LBo9_00239 横森理香『いつまでも二人で』扶桑社2000)

[17] 知らない土地では子育てに不安を抱えても頼れる親族がおらず、地域に溶け込む機会も少ない。1歳の長女と参加した主婦(41)は「家に子どもと2人きりしていると、煮詰まってしまう時もある。誰かと会話するだけで、ずいぶん気が楽になる」と話す。(「交流の場 転勤族の母に 小倉南の市民団体が企画＝北九州」読売2014.6.13 西部朝刊)

[18] 「母と顔を合わせるだけでは煮詰まってしまいます。ボランティアが私の気分転換になっています」(「[言わせて!] 私の両立 ボランティア 介護の気分転換」読売2015.4.14 東京夕刊)

[19] 千葉教諭は「脚本で意図したねらいが当たって、客席が反応してくれると『やった』と生徒も私もうれしくなる。部活では、顧問が煮詰まってはいはだめ。部員を楽しませる名目で、しっかりと自分も楽しんでいる」と話す。(「(どさんこ STREET) 創作劇、楽しく演じる 余市紅志高／北海道」朝日2018.12.4 朝刊)

いわゆる「ワンオペ育児」や家族の介護に関連する例が目立つ。

B〈人間が、長く一つの作業に取り組み続けた結果、疲労や飽きなどのため、この先のいい

作品・結果につながるような新しい発想・アイデアが出てこない状態になる)

[20] また TAKA {=プロレス団体代表} は連日、試合カードなどいいアイデアはないか?面白い企画はないかとそればかり考えている。当然、頭は煮詰まってくる。そうするとパチンコ屋に行き1日中、パチンコをする。(BCCWJ・PB30_00008 ターザン山本『クレイジー・サマー』新紀元社2003)

[21] 名人と、A級を8勝1敗で駆け抜けた挑戦者。最高峰レベルの読み合いで、二人の脳内には変化が渦巻いているのだろう。思考に煮詰まって水を口に含み、席を外し、時のため息をつきながら再び変化と格闘する。答えの見えない世界の中で、両対局者は知力を尽くした。(「将棋：第74期名人戦七番勝負 挑戦者・佐藤天彦八段―羽生善治名人 第2局の9」毎日2016.5.15 東京朝刊)

[22] 前田さんが戯曲や小説を書くのは、学生時代から通う五反田駅前の喫茶店だ。短くて3時間、長いと6時間。煮詰まると店を出る。幼い時から親しんだ個人商店や料理店はほとんど消え、チェーン店が彩る街へと歩き出す。(「(各駅停話：823) 東急池上線：1 五反田 工場の町、変わらぬ居心地」朝日2017.1.4 夕刊)

[23] アトリエとは別に、ミカン畑の間に立つ一軒家に住む。家賃は月1万5千円。野菜は畑で収穫し、近所からのおすそ分けもある。制作で煮詰まったら扉を開けて外へ。島の景色に、心が安らぐ。(「(ひと in 呉) 折出智世さん 31歳 豊島に移住したイラストレーター／広島県」朝日2018.7.2 朝刊)

主に、創作活動・知的活動が停滞することに関して使われる。

C〈ある社会・組織やその活動が停滞・沈滞して、新たな展開や今以上の発展が見られない状況になる〉

[24] でも、やがて、奈良の都は煮詰まってしまったらしい。僧侶が力を持ちすぎて、政治にまで口をはさんだりして。で、当時の天皇である桓武天皇は、奈良を出て、別の場所に都を造ろうと考えた。気分一新、新規まき直してわけね。(BCCWJ・PB19_00634 風見潤「黒幕をやっつけろ―Tokyo 捕物帳」講談社2001)

[25] 九州経済連合会が農協などと協力して、「九州産」の農産物の輸出を強化する。〔中略〕九経連の麻生泰会長は「TPPでゲートが開く。国内市場で煮詰まるより伸びる市場で売るべきだ」と話す。(「アジアのスーパーに「九州産」 九経連・農協、販路拡大へ まず香港の20店舗【西部】」朝日2015.10.15 朝刊)

[26] 既存の政治が煮詰まると異分野の大物が出てきて旋風を巻き起こす、アメリカ政治の活力も私は改めて感じます。暴言も出ないけれど面白くもない日本の政治家の討論風景を、つつい思ってしまう。(「(耕論) トランプ人気 町山智浩さん、海野素央さん、湯山玲子さん」朝日2015.11.10 朝刊)

[27] 本書は多分、団塊ジュニア世代（71～74年ごろ生まれ）の青春を真っ正面から描いた初めての小説だ。戦争の痛みや政治運動、バブル景気といった時代の大波が過ぎた後を生きてきた世代。「ええ、まだ煮詰まっていなかったとも言えます。原発は爆発せず、若者世代の貧困もなく……」（『読書日記：著者のことば 燃え殻さん』毎日2017.8.15 東京夕刊）

前節で見た [14]・[15] の「議論が煮詰まる」は、個々の参加者に注目すればBの状態にあるともいえるが、「議論」を「ある組織の活動」と考え、それが停滞するということなので、Cに含めた。

意味別の用例数を表4にまとめた。「不明」とは、次のような、どの意味か決め難い例である。

[28] パッチワークが趣味で「煮詰まると針を持つ」。こたつの上掛けなどを2～3年がかりで完成させる。（『(2014衆院選) 候補者はこんな人 3区／秋田県』朝日2014.12.6 朝刊）

総選挙立候補者の紹介記事で、A〈(選挙活動等で) 余裕のない心理状態になると針を持つ〉・B〈(政策等を考えていて) いいアイデアが出てこない状態になると針を持つ〉のどちらとも解釈できる。

表4 BCCWJ (2000～)・「三大紙」(2014～2018) における「誤用」の意味別用例数

	A	B	C	不明	計
BCCWJ	12	14	8	2	36
朝日	33	12	7	8	60
毎日	4	4	2	4	14
読売	4	7	3	0	14
計	53	37	20	14	124

ここで、第2章に挙げた国語辞書の「誤用」の記述・例文を確認すると、『大辞泉』『三省堂国語』はB、『明鏡』『大辞林』はCを中心に据えている。『旺文社』『三省堂現代新国語』は記述が抽象的で例文もなく、それゆえA・B・C全体をカバーできる。それ以外はB+Cというところである。そして、もっとも用例数の多い、Aの〈追い詰められた心理状態になる〉という意味を明確に示した辞書はまったくないことがわかる。

6 意味変化の要因と背景

今日の「誤用」例を見たところで、本章では、原義から「誤用」が発生した意味変化⁶⁾の要因や背景を考えてみる。語形の似た“行き詰まる”からの類推という要因はしばしば指摘されるが、それだけとは考えられない。

6-1 1979年の「誤用」例

新野 (2021b) では、「誤用」の初例を探索した結果、歌手・松山千春 (1955～) の 1979 年刊の著書『足寄より』(小学館) や同時期の雑誌掲載の「手記」等に今日「誤用」とされるような例が少なからず見出されたことを述べ、それらの例を意味により以下の $\alpha \sim \gamma$ に 3 分類した。それぞれの例を 1 例ずつ挙げておく。

・ α 〈(不本意な状況でさまざまなストレスやプレッシャーにより) 気持ちの余裕がなくなり、不安定な心理状態になる〉

[29] 正反対だね。おやじとおっかあは。正反対だからよかったのかな。

おやじはいつも家にいる。四六時中顔つきあわせてたら、いくら男みたいなおっかあでも、煮つまっちゃうよ。{工事現場で泊まり込みで働き} 月に一、二度しか家に帰らなかったのは、そんなこともあったのかもしれない。(『足寄より』 31)

・ β 〈(創作活動において、優れた作品を生み出すような) 新しい、いいアイデア・発想が出てこなくな(り、先に進めなくな)る〉

[30] たしかに、{井上} 陽水はとつても好きだった。あの人の歌すばらしいと思う。

ただ、ここへきて煮つまりかけてる感じするじゃない。あの人、まだ死んでないと思うし、もっともつといいものどンドン出してほしいと思う。(「松山千春 オレはちょうどいま転換期をむかえた」『セブンティーン』 1979.7.17 号 : 49)

・ γ 〈沈滞したバツとしない雰囲気で、この先新しい展開・発展が見られなさそうな状況になる〉

[31] 帯広の空港ってのは煮詰まり空港でさ。飛行機まで、パラパラハタハタ、ちんけなヤツでよ……。でもここに着くと、「帰って来たぜ、北海道」って気がするのでアリマス。(「CLOSE-UP ふるさと、生きがい、そして我が青春 松山千春からのメッセージ」『non. no』 1979.10.20 号 : 54)

今回の分類と照らし合わせると、 α は A、 β は B、 γ は C に相当する。つまり、「誤用」の初例 (現時点で) が見られる 1979 年に、すでに今日見られる A~C すべての例が出そろうっていたわけで、ここからは三つの意味の間の先後関係はわからないことになる。

なお、新野 (2021b) では、当時のジャズ界、音楽業界でこの時期すでに γ の意味の“煮

詰まる”が広く使われていた可能性に言及した。しかし、その後それを裏付けるような有力な資料は見出せていない⁷⁾。したがって、そこで示唆した、“煮詰まる”の芸能界での「業界用語」的な意味・用法が、松山のような人気芸能人の使用をきっかけに一般に知られ、使われるようになった、という可能性についても、現時点では明確なことは言えない。引き続き今後の課題である。

6-2 加藤 (2014) の論

ここで、この語の意味に関して述べた加藤 (2014 : 232-233) に注目する。加藤は次のように指摘する。

[32] 「煮詰まる」が「結論を得られるほど議論が尽くされた状態」になるのは比喩である。一方で、「委員はみな煮詰まってしまい、議論が進まない」というときも、比喩である。①の意 {= 「正用」} にとる比喩は慣用だが、②の意 {= 「誤用」} に解釈する比喩もそれなりの合理性がある以上、慣用度の違いに過ぎない。(234)

さらに、「煮詰まる」が自動詞で、「煮詰める」という他動詞と対になっていること」を指摘し、次のように述べる。

[33] 自動詞と他動詞がこのように対になっているときは、自動詞は意志が関与しない、自然の変化を意味することが多い。つまり、「煮詰まる」とは火にかけておけば自然にそうなる変化で、意図的に「煮詰まる」ようなものではないということだ。議論の結果、考えが煮詰まる (= 完成段階になる) ときには、話し合っている人は考えをまとめて結論を出そうという意志を持っているのが普通である。しかし、話し合っている中で参加者がもう新しいアイデアを出したり滞った議論を打開させたりできなくなるという変化は、みんなが望んでいなくても、自然のなりゆきで生じてしまうものである。つまり、自動詞の非意志的变化という意味では、②の新しい解釈がより合致している。こうなると、無理に本来の意味だけを正用としなくてもいいように思える。(234-235)

実例の調査・分析はないものの、“煮詰まる”について比喩の合理性と動詞の自他による性格の違いという独自の観点から考察した点は注目すべきである。

加藤の述べるようにこの語の「正用」「誤用」が (そして〈凝縮〉も)、比喩により生じた意味であることに異論はないであろうが、「誤用」の発生・浸透の要因・過程については、先行文献で様々な考えが示されている。次節ではそれを見ていく。

6-3 先行文献に示された考え

ここで、第2章に挙げた国語辞書における原義の記述を確認する。[3] の『ハイブリッド新辞林』では〈長時間煮て、水分がなくなる〉とニュートラルな態度なのに対し、[4] の

『日国』は〈煮えすぎで水分が蒸発してしまう〉と、好ましくない状況として記述している。最新版の国語辞書では、ニュートラルな態度のものが〈煮えて水分がなくなる〉(『現代国語例解』『広辞苑』)、〈長時間煮て、水分がなくなる〉(『大辞林』)〈煮えて水分や汁がなくなる〉(『岩波国語』)と多く、むしろ好ましい状況としてとらえている〈よく煮えて水分がなくなる〉(『三省堂現代新国語』)もあり、『日国』のような立場の記述は見られない。

原義の例を見てみると、

[34] 鍋にイカナゴと、しょうゆ、砂糖、みりんを各適量、少しのショウガを入れたら、あとは焦げないように煮詰まるのを待つだけだ。(「[食]旬な産地 イカナゴ 瀬戸内海に春 兵庫県姫路市」読売2016.3.16 東京朝刊)

[35] 鍋にジャガイモを入れコナツミルク、ターメリック、砂糖小さじ1、塩小さじ5分の1を加え火にかけ、途中かき混ぜながら汁が煮詰まりとろりとするまで煮ます。(「(料理メモ) ジャガイモのコナツミルク煮」朝日2016.5.24 朝刊)

[36] 15個あったカリンは、砂糖漬け、ジャム、煮付け、焼酎漬けに、3晩かけて挑戦した。{中略} ワインレッドに煮詰まったジャムにレモン汁を搾り落とす。木製のさじでひとすくいし味見。「うまいなー」。思わず一人でほくそ笑む。(「しらかば帳：秋の楽しみ／長野」毎日2017.11.14 地方版／長野)

のような〈煮詰まる〉ことが料理の完成という好ましい状況に至ることを意味する例と、

[37] {スパゲッティの} ゆで汁は少し取り分けておき、ソースが煮詰まったり、スパゲッティと具をからめにくいときに加えます。(BCCWJ・PM41_00077 『レタスクラブ』2004.4.25号 SSコミュニケーションズ)

[38] 1日に千杯も出るが、つくり置きはせず、直径約35センチの鍋で20～25杯ずつつくる。「効率だけ考えれば、もっと大きな鍋で大量に煮ればいいということになる。でも、それでは味にムラができたり、煮詰まったりしてしまう」。(「(やまぐち食探訪) 山陽小野田 アサリどっさり、特盛貝汁／山口県」朝日2016.4.27 朝刊)

[39] 葉唐辛子と言え、つくだ煮が思い浮かぶが、今回はさっと煮。{中略} 葉の色が変わらず、汁が煮詰まらないうちに火を止め、鍋ごと氷水に入れてしっかり冷やせば完成だ。(「魯山人風 木胡椒の当座煮 葉唐辛子 シャキシヤキ」読売2018.7.14 東京夕刊)

のような、〈煮詰まる〉ことが料理の味の低下という好ましくない結果に至ることを意味する例の両方がある。

そして、いずれの場合でも、〈煮詰まった〉段階で火を止めなければ焦げついてしまい、料理は完全な失敗となる。この点に、「誤用」発生・浸透の要因を求める文献がある。

[40] 何かを「煮詰める」のは理性的で計画的な感じもするが意図せず煮詰まった鍋はあと一歩で焦げつく。マイナスの意味での誤用も実感としては分かる。(「春秋」日経

2008.7.26 朝刊)

[41] 確かに〈煮詰まる〉は、煮詰まって焦げれば台なしになる、という解釈もできるし、そんな語感もないことはない。(岩見 2008)

[42] 料理が煮えすぎて水分が蒸発してしまい、味が濃くなり過ぎたり、焦げ付いてしまったりといった望ましくない経験をすることは誰にでもあるでしょう。その結果、中身が濃縮していくという面に着目した本来の意味が忘れられ、行き詰まってしまうというマイナスイメージと結び付きやすくなっているのかもしれませんが。(文化庁国語課 2015 : 68)

[43] {煮物には、「タツプリの薄めのだしでコトコトと煮て」いくタイプと「少なめの煮汁を強めの火で蒸発させながら一気に加熱」するタイプがあり} 煮詰める技法は、一般的に後者の煮物料理で使われるものでしょう。強めの火で煮るので、注意しておかないと、煮汁が蒸発し切って焦げ付きます。焦げ付く寸前や、焦げ付いた状態が「煮詰まる」のイメージとして定着して、行き詰まると誤用されると思います。(山田亮「スーパー主婦楽家事 煮込み料理 煮詰まるとおいしい」東京 2016.2.29 朝刊)

[44] 水分が蒸発し煮えすぎたというイメージと結び付いたためか、「行き詰まる」と混同されたためか、「結論が出せない」という正反対の使われ方も広まった。(佐原 2018)

さらに、「誤用」の背景には日本の料理文化の通時的変化が大きく関与している、とする意見もある。

[45] 従来「煮詰める」ことは、「煮物」を作ることが目的であった。そのために手段として「煮詰める」ことが必要であったのです。「煮詰めた」結果、その料理が「煮詰まる」わけです。だから会議などで比喩的に使う場合も「煮詰める」ことによって「結論に近づく」(=会議の目的に近づく)わけです。

しかし、最近はおふくろの味である「煮物」もスーパーやコンビニ、あるいは「デパ地下」と呼ばれるデパートの地下食品売り場で買うことが増えて、家庭で「煮物」を作ることも、作っている姿を見ることも減ってきた。それに伴って、「煮詰める」ことのよって料理を作ることの意識が薄れてきたのではないのでしょうか。

また、それとは反対に、外食でも家でも「鍋物」を食べる機会は増えているように思えます。この「鍋物」において「煮詰まる」ことは、料理を完成に導く過程ではなく、「水分がとんでしまって適度ではない。食べごろを過ぎてしまっている状態」を指します。皆さんが日ごろ目にすることが多い「煮詰まる」は、こちらの方ではないのでしょうか。

それに伴って議論・会議に比喩として使われる「煮詰まる」の意味合いも変化してきたと考えられます。(道浦 2001)

19年度調査の結果を受けた、『文化庁月報』平成20年10月号 (No. 481) 掲載の「座談会 日本人の国語力と言葉遣い」(出席者：出久根達郎・林史典・井田由美・匂坂克久(国語課長：当時))にも同様の意見が見られる。

[46] **井田** {中略}「煮詰まる」について言うと、煮物をしなくなったことが影響していると思うんですね。昔は「煮詰まる」というのは煮物が仕上がることでしたが、今はおそらく、若い人は煮詰める料理をあまりしなくなって、宴会で鍋でも食べに行くと、「煮詰まっちゃったよ」と言うと、いいことではないんですね。多分その辺に何か世代の差がありそうです。

林 私もそれは感じました。煮詰める料理と煮詰めない料理があつて、昔は煮詰める料理が多かった。けれど、今の若い人たちはあまりそういうものを食べないでしょう。煮詰まるというのは、料理を失敗しちゃったという……。

井田 煮詰めようとして煮詰まったというのではなく、「煮詰まっちゃった」ということなんですね、今の「煮詰まる」は。(20)

一方、次のような指摘もある。

[47] 煮汁がぐつぐつと音を立てて煮えている状態から、水分が飛んでほどよく味がしみこんだ状態に変わるのが「煮詰まる」ということだったのですが、その一方で、すっかり水気がなくなって煮える動きが止まってしまった「膠着状態」を思い描くこともできるため、「行き詰まって身動きができなくなる」という解釈がなされるようになったのだらうと思います。(砂川 2005: 147-148)

[48] 「議論」や「計画」あるいは「アイディア」なら、料理が煮詰まって完成に近づくように、「煮詰まる」ことで「完成する・完成に近い状態になる」のは、ごく自然なことである。しかし、「行き詰まる」「差し詰まる」「切羽詰まる」などの類推で、「動きが取れなくなる」という意味が移しこまれ、人間が「煮詰まる」と疲労が蓄積して柔軟さがなくなり、物事を進展させられなくなる状態という解釈になるのも、無理なことではない。煮詰まって汁気がなくなると、次の展開がなく、行き詰まったようにも見える。(加藤 2014: 233)

[47]・[48] は、〈煮詰まる〉ことが望ましい料理か否かに関係なく、とことん煮た結果水分がなくなってしまうと、もうそれ以上煮ることはできなくなる、という側面に注目した指摘である。

まとめると、原義と「誤用」の関係については三つの見方が示されていることになる。

① ([40] ~ [44] の立場) 水分がなくなるまで〈煮詰まる (原義)〉ことは、料理によっては味を落とすことになるし、焦げつく恐れもある。そこから、望ましくない状態を表す「誤用」が発生した。

② ([45]・[46] の立場) 〈煮詰まる (原義)〉ことが望ましい料理と、そうでない料理と

がある。煮物のような前者の料理を作らなく・食べなくなったのに対し、鍋のような後者の料理は食べるようになったことから、〈煮詰まる（原義）〉ことを望ましくないととらえる人が増え、「誤用」が発生・浸透した。

- ③（〔47〕・〔48〕の立場）そうなることが望ましい料理かどうかによらず、〈煮詰まる（原義）〉ことはそれ以上煮ることはできなくなるということで、そこからそれ以上先に進まなくなる、新しい展開は見られなくなるという「誤用」が発生した。

これらのうち、筆者は、まず②の前提となる、「従来」（〔45〕）・「昔」（〔46〕）と比べて「煮詰める料理」を作らなく・食べなくなったのに対し「煮詰めない料理」はよく作る・食べるようになった」という事実認識の妥当性を問いたい。ここで言う「従来」・「昔」というのが具体的にいつのことなのかかわからないが、『日国』の引く原義の例が、2例とも「煮詰まる」ことが料理の味を落とすことを示すものであることからわかるように、明治・大正期も汁や鍋のような「煮詰めない料理」はよく食べていたはずである。また、旧来の和食だけでなく、洋食でも〔35〕や〔36〕に見られるような「煮詰める料理」は多くある。さらに、圧力鍋や焦げ付きを防ぐ温度センサーといった「煮詰める料理」を作るのに便利な器具の普及もある。「煮詰まる」ことが望ましい料理を家庭で作ること、食べることは、そこまで、つまり一つの語の意味を変化させるまでに少なくなったと言えるのか、説得力のある根拠が乏しいのではないか。

そして、①や③の論でも、本稿のような「誤用」の意味分類は行っていない。しかし、この問題について考えるには、原義と「誤用」の三つの意味それぞれとの関係について考える必要がある。

6-4 比喩義の発生過程

新野（2021a, b）では、原義の初例は1841年、「正用」・〈凝縮〉のそれは1928年・1941年に見られるのに対し、「誤用」の初例は1979年であることを述べた。したがって、原義から「正用」あるいは〈凝縮〉を経て「誤用」が発生したという見方もできる。しかし、筆者は、現時点では、原義から「正用」や〈凝縮〉を経ることなく、直接A～Cの意味が発生したと考えている。

まず、Aのタイプの「誤用」が発生した過程については、次に挙げる『読売』の人生相談記事が参考になる。母親と二人暮らしの女性からの、「母が持病のストレスで自分に八つ当たりをし、自分も声を荒らげる時がある」との相談に、次のような回答が寄せられている。

〔49〕あなた一人が抱え込まないことが大事だと思います。鍋で煮詰まったように2人で暮らすとどうしても「売り言葉に買い言葉状態」になります。ここは介護保険のシステム等を十分に利用し、少し互いの距離を取っていくこと。その方がかえって母上との関係がスムーズになるように感じられます。（野村総一郎・精神科医）（「[人生案

内] 20代後半、将来と家庭で悩む」読売 2012.6.16 東京朝刊)

ここでは、家に母子二人だけでずっと一緒に暮らす様子を「鍋で煮詰まったよう」という直喩で表現している。第5章に引いた〔17〕・〔18〕のようなAの「誤用」例を思い出させる。原義の〈鍋の中で長時間加熱されたことで、水分（具材を泳がせるような余裕）がなくなり、汁や食材の味が濃くなっていく〉という側面から、〈逃げ場のないストレスやプレッシャーのかかる状況に長時間置かれたことで、心中の余裕がなくなり、イライラが濃くなっていく〉という比喩義Aが生じたと考えられる。

一方、原義の〈長時間加熱されたことで、水分（具材を泳がせるような余裕）がなくなり、それ以上煮ることはできなくなる〉という側面から、〈長時間考えたことによる疲労などにより、頭の中でいろいろなことに考えをめぐらす余裕がなくなり、これ以上のアイデア・発想が出てこなくなる〉というBの比喩義が生じる。

さらに原義の〈それ以上煮ることはできなくなる〉という側面からは、〈社会・組織やその活動が停滞し、今以上の発展が見られない状況になる〉というCの比喩義が生じる。

つまり、〈煮詰まる（原義）〉とは〈I長時間加熱された結果、II水分がなくなり、III味が濃くなって、IVそれ以上煮ることはできない、という状況になる〉ということであり、このうちのI・II・IIIの側面からはA、I・II・IVの側面からはB、IVの側面からはCが生じた、ということである。

そして、「正用」は原義が〈料理の最終的状況に至る〉ことである（これは、「煮詰める料理」「煮詰めない料理」のいずれにおいても同じことである）ところから、〈凝縮〉はIIIの〈味が濃厚になる〉ところから、それぞれ別個に発生した比喩義と考えられる。

7 おわりに

以上、今日の“煮詰まる”について、先行文献の整理、世論調査の結果の分析や、事例調査による使用実態の把握、意味変化の経緯の検討を行った。新野（2021b）で検討した「正用」「誤用」の発生時期の問題も含め、今後明治～昭和期の用例をさらに採集・検討し、考察を進めていきたい。

一方、この語の今日の様相についてはまだ残された問題がある。

加藤（2014：232-233）は、19年度調査の結果について、

〔50〕これは質問のかたちに影響を受けたために、{「誤用」の回答が} 三分の一度程度にとどまっているのかもしれない。{中略} 質問形式の問題というのは、誤解している人は「計画が煮詰まっている」とは使わず、「私たちが煮詰まっている」のように、人間の状態を形容するのに使うことが多いことが十分に考慮されていないことである。と、質問文に注文を付ける（この直後に前掲の〔48〕が続く）⁸⁾。

また、靱山（2019：117）は、

[51] 現代日本語の「煮詰まる」という多義語の場合、〈(料理等で)水分が少なくなる〉という意味は日本語話者の大半が知っているのに対して、おおよそ〈完成に近づく〉（「計画が煮詰まってきた」等）と〈行き詰る〉（「煮詰まっちゃってこれ以上アイデアが出ない」等）という2つの意味については、その一方しか知らない人が相当数いる。

とする。

さらに、「日本語本」等ではしばしば、

[52] 例えば上司から会議の進み具合を尋ねられた部下が、うまく進んでいない状況を伝えるつもりで「今、煮詰まっております……」と言ったのに対して、上司は、部下の意図とは反対に、議論が最終的な段階に差し掛かっていると受け取ることも考えられます。（文化庁国語課 2015：68）

のような、実生活でこの語をめぐる誤解が生ずることを懸念する記述が見られる。

[50] ～ [52] はいずれも、「この語の意味は日本社会全体で見れば「ゆれ」があるが、個人においては、「正用」と「誤用」のいずれか一方しか知らないし使わない、というケースが大半である」という前提に立っているように思われる⁹⁾。しかし、果たしてそうであろうか。[16] ～ [27] のような使い方をする人の大部分は、[11] ～ [13] のような「議論が煮詰まる」という使い方を知らず（せず）、世論調査で「正用」を選んだ回答者の大部分は、[16] ～ [27] のような使い方は一切しないのであろうか。同じ人が、「議論（計画）がようやく～」のような場合は「正用」として解釈しあるいは使い、「私は育児で～」「あれこれ考えすぎて～」のような場合は「誤用」として解釈しあるいは使い、それを別に問題と感じない、というケースも、決して珍しくないのではないか（このような疑問が生じるのは、同様に対義的方向への意味変化の例として知られる“気がおけない”や“世間ずれ”（新野（2021）参照）とは違うところである）。

この問題については、世論調査で「正用」と「誤用」A・B・Cすべて、さらには〈凝縮〉も選択肢として挙げて、「どの意味で使うか」を複数回答可で尋ねる、という調査を行えば、大きな手掛かりになるであろう¹⁰⁾。

最後に、第2章で見たような近年の国語辞書や新聞の用字用語集の記述を見ると、近い将来、“煮詰まる”は「誤用」の事例とは呼べなくなる可能性もある。様々な点に関し、この語については引き続き注目していく所存である。

追記

本稿校正作業中の2022年1月に刊行された『三省堂国語辞典』第8版では、“煮詰まる”の項の記述が以下のように変わっている。

・①煮えて水分が(あまり)なくなる。煮えつまる。「なべのしるがー」②ものごとがつきつめられる。凝縮する。「自然の美しさが作品に一」③話が進んで〈結論／終わり〉に近づく。「議論がー・日取りがー」④ものごとが限界をむかえ(て、進まなくな)る。「頭がー [=働かなくなる]・捜査がー」▽③④は特に二十世紀後半に広まった用法。若い世代では④の用法が主流。

②として〈凝縮〉が加わったことが注目される。④は「誤用」であるが、意味記述は全体をカバーするような抽象的なものになり、用例はBとCである。やはり、Aの意味は明確に示されていない。

註

- 1) 筆者は、「」つきの「誤用」を、〈辞書や「日本語本」等で、「このような意味(用法・形式)で使うのは誤りである」とされているなどして、「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方」という意味で使う(新野(2020:2)参照)。
- 2) 新野(2021a)は新野(2021b)の補足的な論文であり、執筆・投稿は新野(2021b)より数か月あとであったが、掲載媒体の刊行日は、同じ2021年3月ではあるが若干早くなった。
- 3) ただし、学部卒業論文として、相模女子大学学芸学部日本語日文学科2011年度卒業生・今井南氏の「煮詰まる」論—2つの意味から考える誤用と正用がある。筆者は、この論文を、今井氏の指導教官であった同大学の梅林博人教授のご厚意により、閲覧させていただくことができた(この場を借りてお礼を申し上げます)。公開されている論文ではないため、「参考文献」として扱うことはしないが、優れたレベルの卒業論文であることは述べておく。
- 4) 新野(2021b)で、『日国』の③が挙げる2例は、いずれも〈(戦争が)進展して終局に近づき、(日本の敗戦という)結論が間もなく出るといいう状況になる〉ということを表す「正用」例と考えるべきである、ということ述べた。
- 5) 岩見と同年代の解剖学者・養老孟司(1937～)は、「煮詰まった」と題したエッセイ養老(2015)で、経済、科学、技術等世のもろもろが今日(「誤用」の意味で)「煮詰まった」、と述べており、本文中には「誤用」が全15例見られる。
- 6) 小柳(2013)は、言語変化には以下の三段階があり、「採用」の段階に至ってはじめて言語変化といえる、とする。

・案出：新しい言語表現の産出。ある個人がある時に1回行う。

試行：新しい言語表現の拡散。複数の人が散発的に行う。

採用：新しい言語表現の受容。ある集団内で人々が漸次的に行う。(16)

そして「多くの用例数が確認できれば問題なく採用されたと判断できるが、明確な判断基準があるわけではない」(17)とする。“煮詰まる”の場合、今回見たような今日の使用実態から、「正用」はもちろん、「誤用」もすでに「採用」の域に達しており、この基準に照らしても「意味変化」と呼ぶことに問題は無いと考える。

- 7) 現時点で採集している資料を挙げておく。ともにジャズピアニストである八木正生(1932～1991)と山下洋輔(1942～)は、1982年の対談記事「ピアニスト縦横対談 ぼくたちはセロニアス・モンクが好きだった」(『話の特集』1982.5)で、

[53] 山下 {それまで「非常にいい商売」だと思って音楽をやっていた八木が、モンクの曲を聴いて} これしか無いとすごいものを感じたというのは、その頃やられてたことが不満だったわけですか？煮つまってたとか。

八木 違う違う。煮つまってたとかじゃなくて、もっと真面目にやらなきゃいかんと思った。(21)

と、“煮詰まる”を「誤用」(AあるいはB)の意味で使っている。しかし、山下は8年後のエッセイ・山下(1990)で

[54] 意味合い。それって。とかの。という状況。何なにした形で。煮詰まって。するものの。私何なにする人なの。など嫌いな言葉はまだあるが、そんなことを言っていると人と話ができない。

と、「嫌いな言葉」の一つとして「煮詰まって」を挙げている。

- 8) 世論調査の「七日間に及ぶ議論で、計画が煮詰まった」という例文については、加藤が挙げたのとは別の「影響」を指摘しておきたい。一つの計画について七日間も議論した、という事実は、この議論が相当もつれ、難航したことを想像させる。これは容易に結論がまとまるような計画ではない、と考え、〈結論が出せない状態になる〉という選択肢を選んだ回答者もいたのではないか。これが「3時間に及ぶ議論で～」であれば、違う結果になったように思える。
- 9) [52]のような場合、「上司」が「正用」と「誤用」の両方の意味があることを知っていれば、場面や前後の文脈、話し手の表情や口調、雰囲気などで、どちらの意味か判断できるケースがほとんどであろう。メールやLINEであれば表情や雰囲気はわからないが、それでも、例えば「やっと煮詰まってきました」であれば「正用」、「ちょっと今、煮詰まっております」であれば「誤用」だということは容易に判断できるはずである。
- 10) ただし、この世論調査の新語・新用法についての設問は「この語句をどちらの意味で使うか」や「この意味でこの語句を使うか使わないか」といった二者択一の形式が基本なので、実現はなかなか難しいと思われる。

参考文献

- 岩見隆夫(2008)「サンデー時評523 「煮詰まる」ショック、ほっとけない」『サンデー毎日』87(33):44-45 毎日新聞出版
- 加藤重広(2014)『日本人も悩む日本語—ことばの誤用はなぜ生まれるのか?』朝日新聞出版
- 小柳智一(2013)「言語変化の段階と要因」『学芸国語国文学』45:14-25 東京学芸大学国語国文学会*小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版に収録
- 佐原慶(2018)「校閲記者のこの一語4 「煮詰まる」あなたはどちら派?」『日本語学』37(10):35 明治書院
- 砂川有里子(2005)「会議が煮詰まる」北原保雄編『続弾!問題な日本語』147-155 大修館書店
- 新野直哉(2011)『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』ひつじ書房
- 新野直哉(2020)『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』ひつじ書房
- 新野直哉(2021a)「辞書に載らない意味—“煮詰まる”の場合」『言語文化研究』20:1-9 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会
- 新野直哉(2021b)「“煮詰まる”の「誤用」について—その発生時期と拡散の背景を中心に」『近代語研究』22:107-128 武蔵野書院
- 文化庁国語課(2015)『文化庁国語課の勘違いしやすい日本語』幻冬舎
- 道浦俊彦(2001)「◆ことばの話333「煮詰まる」」<https://www.ytv.co.jp/announce/kotoba/index.html>
- *道浦俊彦(2003)『「ことばの雑学」放送局—「新語・造語・迷用法」をアナウンサーが楽しく

解説』PHP 研究所に収録

羽山洋介 (2019) 「百科事典的意味の射程—ステレオタイプを中心に」森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を紡ぐ』115-135 くろしお出版

山下洋輔 (1990) 「ドバラダ・トーク 困った思いパート 2」『日本経済新聞』1990.7.21 朝刊

養老孟司 (2015) 「巻頭言 5 煮詰まった」『Voice』449 : 15-17 PHP 研究所

付記

本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の研究成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY

The actual usage of “nitsumaru” and the its progressive change in meaning:

An example of “misuse” in modern Japanese.

NIINO Naoya

The verb “nitsumaru” is used to mean “soon to reach a conclusion” in its correct use and “get more and more stuck” in its increasing misuse. Regarding the problems related to “nitsumaru”, I have previously published manuscripts on prior literature, timing in correct use and misuse, and background behind the spread of its misuse. This paper subsequently considered the current usage of this term based on the treatment of its misuse in Japanese dictionaries, results of opinion polls, and results of actual surveys. In addition, from the results of two polls, it seems that misuse is growing in popularity among the elderly. Examples of misuse can be classified into three categories: examples of human psychological state, examples of human thinking, and examples of the situation of things. Furthermore, I considered the progression of misuse from the original meaning, using the example “as a result of heating for a long time, the water disappears, the taste becomes deeper, and it cannot be boiled any more”. I consider the misuse occurring from this point.

Key Words: “nitsumaru”, “misuse”, change in meaning, metaphor, modern Japanese